

インドネシアにおける華僑・華人が創設した大学と 孔子学院の関わりに関する一考察

劉 国彬*

A Study on the Relationship between Confucius Institutes and the Universities Established by
Chinese Residents in Indonesia

Guobin LIU*

ABSTRACT

For investigating the relationship between the Confucius Institute of Al Azhar University of Indonesia and the universities founded by local Chinese, the author conducted a survey of Bina Nusantara University and Bunda Mulia University. The Chinese Departments of both universities are helped by the Confucius Institute and the teachers of both universities use the Confucius Institute Scholarship to study in China. Also, the Confucius Institute received financial assistance from local Chinese entrepreneurs when being established. However, due to the anti-China movement in Indonesia's history, development of the Confucius Institute is politically sensitive and there is no policy preference for universities founded by local Chinese. The Confucius Institute has promoted Chinese language teaching while not conflicting mainstream culture and working with these universities.

キーワード：華人系大学、孔子学院、インドネシア、中国語教育

1. はじめに

周知の通り、東南アジアの国々は早くから移民の教育をめぐる問題に取り組んできた。インドネシアでは、マイノリティである華僑・華人が、自らの経済力を発揮し、インドネシア政府の教育方針に従い、異境で自らのアイデンティティを保持するとともに、その存続と発展のために華僑・華人教育を行ってきた。そうした努力の一環として華僑・華人が創設した大学（以下、華人系大学と略記）が存在している。インドネシアには現在 581 校の大学が存在し、そのうち華人系大学は 13 校程度あると推測される¹。華僑・華人によって創設された大学は、当然ながら、居住国の高等教育発展にもつながっている。同時に、華僑・華人は、居住国であるインドネシアと中国との国際関係の影響を受けることも避けられない。

インドネシアは 1950 年 4 月 13 日に中国と国交を回復し、1949 年に建国した中華人民共和国と最も早く国交回復を実現した東南アジアの国である。しかし、1965 年「9 月 30 日事件」により、1967 年に国交を断絶した。60 年代後半以後、実に 30 年にわたり華語・漢語の使用は禁止され、長い空白期が存在した（大塚, 2015: 50）。インドネシアと中国は 1990 年に国交を再び回復した。2005 年 4 月の

*大学教育センター准教授

「バンドン会議」に出席した当時の中国の胡錦涛国家主席が、「中国とインドネシアの戦略的なパートナー関係」を宣言したことにより、インドネシアと中国は協力関係において重要な一步を踏み出した。2010年、中国はインドネシアとの国交回復60周年をきっかけに、中国とASEANとの自由貿易協定が正式にスタートした。2013年には中国が「21世紀海上シルクロード」の戦略構想を打ち出し、一方のインドネシア大統領のジョコ・ウィドドが2014年に「海洋強国」戦略を公表した。2015年4月、中国とインドネシアは「共同プレス発表」を出し、両国は「海洋発展パートナー」関係を結ぶに至った(王, 2018)。このように中国とインドネシアは、海洋戦略をはじめ、多領域の協力関係を結んだのである。

インドネシアと中国との良好な国際関係の象徴の一つは、インドネシアでの孔子学院の設立である。孔子学院とは、中国の対外文化政策の一環として、中国の中央官庁(国家対外漢語教学領導小組辦公室、略称は「漢辦」)や公的機関が協働し、実施運営してきた中国の海外言語文化教育機関の総称である(華僑華人事典: 452)。主として中国側の大学と諸外国の大学とが提携して事業を進めるパターンをとっている。2004年に韓国に初めての孔子学院が設立されて以来、2019年12月時点で、世界中に541の孔子学院が設置され、その数は飛躍的に増加した。孔子学院は中国政府の事業として位置づけられ、中国語教育と中国文化の普及を目指すものである。この点、「海外の華僑華人社会が基盤となる中華学校とは性質が異なる」(華僑華人事典: 452)と指摘されている。しかし、近年では学問の自由や大学の中立性を損なうものと批判され、アメリカをはじめとする国で孔子学院との契約継続を打ち切る事例が生じた²。こうした孔子学院に対する批判も見られる中、華人が多く居住する東南アジアの孔子学院、特に華人大学を持つインドネシアにとって、孔子学院はどのような存在と捉えられているのか、華人系大学との関係はいかなるものか、これが筆者ら³の関心事である。

上記の課題をめぐって、筆者らは、2019年9月ジャカルタにあるアル・アザール大学孔子学院、ブンダ・ムリア大学、ビナ・ヌサンタラ大学において、関係者に対する半構造的インタビュー調査を行った。調査対象者は、アル・アザール大学孔子学院の(当時)学院長と教員、ブンダ・ムリア大学、ビナ・ヌサンタラ大学の教員であった。なお、本課題を考察するためには、孔子学院のパートナー大学について調査するのが最も適切と考えられるが、目下のところ、インドネシアで華人系大学は孔子学院のパートナー大学として選ばれていない。したがって、インドネシアに最も早く成立し、また首都ジャカルタに存在する唯一の孔子学院であることを理由に調査対象として選んだものである。

本稿では、現地調査のインタビュー内容、関連する書籍・論文、及び各大学のホームページ所載資料、アル・アザール大学孔子学院が刊行している雑誌等を分析資料とする。

これまで、インドネシアの教育に関する研究は、中等教育にとどまり、華人系大学に関する研究はなかった⁴。一方、孔子学院に関する研究は多数存在しているが、管見の限り、華人系大学と孔子学院の関係に関する研究は極めて少ない。巖(2014)は、孔子学院と華人学校を、外部環境、内部組織、中国国内教育機関との相互関係の視点から比較したが、孔子学院と華僑・華人教育との関わりは分析されていない。また、李(2015: 162)は、孔子学院のインドネシア社会における現状分析をし、孔子学院の存在感を高めるために華人社会に大いにアピールすべきだと提案するにとどまっている。

本稿は、まずインドネシアで中国政府が設立した孔子学院⁵の受容過程を概観する。次に、インドネシアにおいてマイノリティである華僑・華人⁶が自らの文化を継承するため大学を創設する際に、インドネシア政府とどのようなプロセスを経て交渉したのかについて歴史的な角度から考察する。さらに華人系大学と孔子学院からの支援との関わり的事例分析を通して、華僑・華人が創設した大学、中国政府が設立した孔子学院の二者がどのように関係し合っているのか、を明らかにしたい。

2. インドネシアの孔子学院の受容と設置状況

前述したように、中国はインドネシアとの協力関係が深まる中、2007年9月、インドネシアに初めての孔子学院「ジャカルタ中国語教育センター孔子学院」を誕生させた(姜, 2011: 13)。ジャカルタ中

国語教育センター孔子学院は、海南師範大学とジャカルタ中国語教育センターが提携して創設されたものである。ジャカルタ中国語教育センターは中国語教育に従事する民間学校で、中国語教育に豊富な人材と経験を備えており、学生は主に華人学校の学生と社会人である。孔子学院の成立当初、教師はたった1人であり、専用の教室や設備はなかったが、2011年に、事務室、図書館、中華文化体験センター、教育プログラムまでが整備された(姜, 2011: 13)。このように、インドネシアの孔子学院はジャカルタ中国語教育センターと連携して設立され、孔子学院のインドネシアでの事業は、最初から華人社会との協力の中でスタートしたと言える。

筆者が訪問したアル・アザール大学孔子学院は、2010年に設立され、上記のジャカルタ中国語教育センターはアル・アザール大学孔子学院と同じ都市にあることから、センターが教師、設備などに関してアル・アザール大学孔子学院と連携するという方法で合併した(大塚, 2016: 99)。そのため現在、首都のジャカルタに存在する孔子学院はアル・アザール大学孔子学院のみである。

アル・アザール大学はイスラム教の私立大学である。同大学には6つの学部があり、その一つである文学部は、アラビア語、中国語、英語、日本語の4つの学科を有する。

アル・アザール大学孔子学院は設立当初の2011年から2012年の間、孔子学院の施設の整備、教員養成プログラムの設立のために、インドネシアの華僑である黄双安氏から25.2万ドルの援助を受けた(李, 2015: 165)。筆者が訪問した2019年の時点では、中国側の学院長1人、教員8名で運営されていた。

現在、アル・アザール大学孔子学院は独自の中国語教育カリキュラムを編成していない。その理由は、首都ジャカルタでは、中国語学科を開設している大学がいくつかあり、それぞれ独自のカリキュラムは確立している。ただし、各大学では教員不足の状況に陥っているため、アル・アザール大学孔子学院の教師は、各大学の要望に合わせて、正規の中国語学部の授業を担当しているという。例えば、国立インドネシア大学では孔子学院の3人の教員が授業を担当している。授業の担当の仕方は、インドネシア人教員が主に文法に関する授業を行い、孔子学院の教員はリスニングと会話の授業を分担している。また、孔子学院の教員は華僑・華人が創設したダルマナガラ大学の中国語学科の2年生の「中級閲読」の授業を担当し、また「現代中国語」「現在中国における人気話題」「中国語の慣用語」などの授業も新たに開設し、単位も出している⁷。このように、アル・アザール大学孔子学院の教員はジャカルタにあるインドネシアの大学の正課の授業に関わり、インドネシアの大学の中国語教員不足の解消に協力している⁸。2020年12月23日にオンラインで開催されたアル・アザール大学孔子学院は成立10周年オンライン表彰会において、インドネシア教育文化省元副大臣及び高等教育局長は、中国とインドネシアが協力して創設した孔子学院が、中国語教育、人文交流、文化活動および科学研究領域において優れた成績を作り、アル・アザール大学の中国語教育の質を高め、その上で、インドネシア各地域の公立と私立の中国語教育に貢献したと称えている⁹。

2010年、中国とインドネシアは国交60周年に際して、前述したアル・アザール大学孔子学院を含め、6校の孔子学院が同時に創設の契約を結んだ¹⁰。その後、2019年に7番目のスブラス・マレット大学孔子学院が誕生した。現在は、首都のジャカルタにあるアル・アザール大学をはじめ、ジャワ島、カリマンタン島、スラウェシ島にそれぞれ設置されている。アル・アザール大学を含め、孔子学院のパートナー大学の選定は、すべてインドネシア教育文化省の推薦に基づくものである(李, 2015: 162)。以上のように、インドネシアの孔子学院の設立契機は、中国とインドネシア両政府の国際関係の国交60周年を記念するプログラムの一つであった。その特徴は、インドネシアのほぼ各島に設置されていることである。アル・アザール大学孔子学院はジャカルタ地区で唯一の孔子学院として、地域の大学の中国語学部の中国語教育をサポートし、中国語教師不足の解消に力を貸している。こうした状況からは、インドネシア社会の中国語に対する需要の程度の一端を窺うことができる。

次に、孔子学院は華人系大学とどのような関係を持っているのかについて、華人系大学に焦点を絞って考察することとしたい。

3. インドネシアにおける華語教育政策の変容と華人系大学の歴史概観

20世紀以後、華語¹¹は華僑・華人のアイデンティティの象徴とされるようになり、彼らは華語学校を設立し、子女に対する華語教育を早くから重視した。しかし、オランダ植民地政府との摩擦・排斥を受け、その発展は順風満帆ではなかった。独立後のインドネシアではスカルノ大統領の下で、1958年の地方反乱を機に台湾の国民党系中華学校の閉鎖が行われた。しかし、新興独立国の政府は中華人民共和国政府や華僑の好感を得るため、華語学校への支援を惜しまなかった(大塚, 2015: 50)。この時期にインドネシアにおいては華僑・華人が創設した高等教育機関がいくつか現れてきた。

1949年に、インドネシア華僑公立高級商業学校は、師範学校の性質を持ち、ジャカルタ中華商会連合会によって現代的な商業管理人材の養成を目的として設立された。高級、初級商科が開講され、最初は生徒237人、教職員17人だったが、1956年に、生徒は950人、教師20人となり、卒業生は現地の大学または専門学校に進学し、現地の商工業界に勤務するか、または台湾や欧米の大学に進学した(教育大辞典: 426)。この学校は1958年に閉校された。閉校された理由は未詳であるが、上記のスカルノ政権による台湾の国民党系中華学校の取り締まりの影響により、閉校せざるをえなかったと推測される。しかし、この時期の華語学校は、それまでの華人教育と違う点があった。つまり、インドネシアの社会に適応する人材を育成することを目標にし、華語を学習するだけでなく、英語、インドネシア語の学習も必須であった(梁, 2013: 8)。

次に挙げうるのは、1953年スラバヤ市華光劇社が創設したスラバヤ華僑師範専科学校である(教育大辞典: 423)。この師範専科学校は最初小学校教員を養成する目的であったが、1959年資金調達困難により閉校した。その後、華光劇社はスラバヤ華僑社団連合会と連携し、1962年に中学校・高等学校教員、外国語通訳を養成することを目的とし、再び開校した。修業年限1年半で、1964年第一期の卒業生を送り出し、彼らはインドネシア各島の華人学校の教員となった。しかし、翌年の「9月30日事件」の影響で閉校の憂き目に遭った。

共産党によるクーデター未遂事件とされる1965年の「9月30日事件」はインドネシアの政治状況を大きく変化させた。「スカルノに代わって政権の座に就いたスハルト政権の下で、華語教育はさらに深刻な局面を迎えることになった。スハルトは華人に対するインドネシアへの同化政策を徹底して推進し、華語使用を禁止し、華語学校を閉鎖した」(大塚, 2016: 23)。こうして、インドネシアの華人は中国語学校で教育を受けられなかっただけでなく、中国語の学習すら公的には認められなくなった。「かくして30年の時間の経過の中で、40歳以下の華人は基本的に華語を理解できない状況が生まれた」(大塚, 2016: 23)

華語教育を圧殺する一方、スハルト政権は、国民経済を振興するため、民営企業を発展させる政策を出した。インドネシアが独立後、オランダが所有した大型企業を国有化し、中小企業はそのまま継続する政策をとった。中小企業の大部分は華人が経営したため、華人の力を借りるしかなかった(梁, 2013: 10)。その中で、ピナ・ヌサンタラ大学の前身であり、1974年に華人のジョセフ・ウィボウォ・ハディポエスピト(Joseph Wibowo Hadipoespito)氏が創ったパソコン補習クラスと、ブンダ・ムリア大学の前身であり、同じく華人のジョコ・サウサント氏が経営したインドネシアで有名な企業(ALFAグループ)は、その好例である。

80年代に入ってから高等教育は爆発的な量的拡大を経験し、高等教育就学率と学生数の変化を見ると、1979年に2.328%(75万4497人)、1989年に7.93%(156万8450人)であった(UIS UNESCO)。この時期に設立された華人系大学がピナ・ヌサンタラ大学である。90年代に入ると、国策大綱(Garis-Garis Besar Haluan Negara 1993-1998)では、「リンク・アンド・マッチ」政策が掲げられ、労働市場や社会の発展に適した人材育成が強調され(中矢 2002: 410-415)、華人系大学も財力とネットワークを拠り所として大学設立が可能であった。1998年スハルト体制崩壊直後には、各地での抗争の中、華人への暴力の横行など再び苦難を経験したが、2000年以降は華人文化に対する開放政策が始まり、2010年以降は中国経済の好調により華語教育熱も高まり、華語学習が非華人にも広まった。この時期、ブンダ・ムリア大学が設立された¹²。

華僑・華人が華語教育に関わった歴史は、華僑・華人によってもたらされたマイノリティの文化がマジョリティの地位にあるインドネシアの主流文化と摩擦を起こし、主流文化に圧迫されたり、あるいは許容されたりする歴史の繰り返しを象徴しているかのように見える。

4. 事例分析：ビナ・ヌサンタラ大学とブンダ・ムリア大学と孔子学院

本節では、ビナ・ヌサンタラ大学とブンダ・ムリア大学でのインタビュー調査と当該大学のホームページ資料に基づき、両大学と孔子学院との関わりについて考察する。

(1) ビナ・ヌサンタラ大学

ビナ・ヌサンタラ大学（英語名：Bina Nusantara University、中国語名：建国大学）は1981年にジャカルタで設立された。20世紀70年代、インドネシアではパソコンブームが起こったために、多くのパソコン補習学校が作られ、ビナ・ヌサンタラ大学の前身もそうであった。1974年に創設者である前述のジョセフ・ウィボウォ・ハディポエスピト氏も家の駐車場でパソコン補習クラスを始めた。当時の社会、パソコンに対する需要が高まる中、補習クラスは正規の補習学校となり、1981年インドネシアの教育文化省の許可を得て、IT分野の学部を持つことを特徴とする大学に昇格した。初代学長には、創設者の長女であるテレサ・ウィディア（Theresa Widia Soerjaningsih）氏が就任した。現在の学長は4代目にあたる。運営・経営方針については、卒業生のみを教員として採用し、ほかの華人系大学と違い、中国大陸・台湾の教師は雇わず、家族的な経営を行っている。

現在、52プログラムに42,306人が在籍しており、中文学部中国語学科には317名が在籍している。中国経済の好調の影響により、中国語の需要が高まり、在籍学生は、華人以外の学生も多くなってきている¹³。中文学部中国語学科は2002年に創設された。学部3年生から2専攻が開設され、一つは企業人材養成のためのビジネス中国語、もう一つは中国語教員養成となっている。卒業要件である144単位のうち、大学および教育学部の必修科目が多く（英語・第二外国語6単位、公民教育、起業）、中国語の授業時数は80あまりである。学生はHSK¹⁴4級に合格できないと、卒業できず留年となり、教育の質の確保に力を入れている。

2019年度後期から、アル・アザール大学孔子学院と提携し、大学でオンライン授業を開設することが予定されていた。アル・アザール大学孔子学院の秘書はビナ・ヌサンタラ大学の卒業生であり¹⁵、孔子学院から授業の提供を受ける一方、大学で養成した中国語人材を孔子学院に送り出しており、孔子学院の援助につながっていることが窺える。さらに、2009年孔子学院は「孔子学院奨学金」プロジェクトをスタートしたため、ビナ・ヌサンタラ大学は孔子学院の教師養成プログラムを利用している。

前述したように、ビナ・ヌサンタラ大学の教員は卒業生のみを採用しているため、いずれの教員も同大学の卒業生である。インタビュー時の面談者である3人の教員の中の一人、30代の女性教員は、祖父が広東梅県出身で、自らはインドネシア国籍を取得したため、華人三世である。ビナ・ヌサンタラ大学の中国語学科を卒業後、教員として採用された。その後、所属大学からの紹介状を以て孔子学院の奨学金を申請して獲得し、2010年に中国の大学の漢語国際教育専攻修士課程（2年間）に留学した。

(2) ブンダ・ムリア大学

ブンダ・ムリア大学（英語名：Bunda Mulia University、中国語名：慈育大学）は、前述したように、創設者はインドネシアで有名な企業（ALFAグループ）の社長、華人のジョコ・サウサント氏（華名：郭桂和）である。氏は1965年の「9月30日事件」による学校閉鎖で、学業を中断した。その後学校にいけないうまま家族企業を手伝ったが、高等教育を受けることができなかった無念さも手伝って、教育に対する夢をずっと持っていた。

ビナ・ヌサンタラ大学と同様、パソコンブームの中で、1984年に情報・コンピューターアカデミー

として発足し、1985年に慈育学校を設立、1990年に慈育基金会を設立した。1995年にはコンピューター・情報管理学院となり、1997年経済・管理学院を、2002年旅行学院を新設し、2003年に大学に昇格した。ブンダ・ムリア大学は「誰でもが学校に行くことができる」をスローガンとして、授業料は安く設定し、経済的困難を抱える学生に奨学金を提供している。創設者であるジョコ・サウサント氏は中国政府の「中国で有名なインドネシア華人企業家」に選ばれた(愛柏珍: 301)。

中国語学科以外は、教授用語はインドネシア語であり、英語と中国語は第二外国語として全学部の必修である。現在、17プログラムに5,700人が在籍し、中国文学部には310名が在籍している。中国語学科は、2005年に人文社会学部の1学科として設立された。

中国語学科の教育目的は、広い視野を持って言語、文化、歴史、ビジネス、華人のビジネスを理解することであり、中国語での会話、インドネシア語と華語・中国語との通訳や翻訳ができること、さらにHSK5級試験で195点¹⁶をとれないと、卒業論文を書く資格がないということが卒業要件として明記されている。こうした教育の質重視の結果は、2019年に「漢語橋」¹⁷スピーチでインドネシアの最優秀成績を獲得し、インドネシアを代表して中国に赴きコンクールに参加することになった¹⁸。

中国語専攻の他、全学の学部で第二外国語として中国語を開設している。大学の多文化主義的方針により民族・宗教に関係なく多様な学生を受け入れているが、中国文学プログラムの学生はほとんどが華人と思われる。卒業後は、他学科の学生よりも3倍から5倍の高給で企業に雇われている¹⁹。

2005年設立当初、浙江大学の協力があり(葉, 2018: 234)、カリキュラム開発の助言から教授・講師の派遣まで支援を受けた²⁰。支援の内容は資金ではなく、知識と人材という意味での支援であると言える。教員は、台湾からの3名、中国大陸からの3名の教授・講師である。インタビューした4人のうち一人の教員は華人系インドネシア人で、家では広東梅州の方言を使用するという。高校卒業後、広西華僑学校(専門学校)に留学、ついで広西師範大学漢語国際教育専攻で修士課程まで修了し、成績優秀で奨学金を取得した。卒業後、バンドンの孔子学院での中国語教員と通訳・翻訳の仕事を経て、2年前から、ブンダ・ムリア大学に勤務している。

現在、中国語学科の学生の約20%が中国政府と孔子学院から中国の諸大学に留学するための奨学金を得ている。しかし、多くの場合は、非華人に奨学金を与えている。インタビューを通じて、インドネシア政府は華人教育に依然として警戒心を抱いており、一方中国政府は政治的に見て慎重に扱うべき問題であることに配慮した結果、華人より非華人を重視する政策をとっていることが明らかになった。ここにもインドネシアの華人が置かれた立場の微妙さを見て取ることができる²¹。

5. 華人系大学と孔子学院の関わり

本稿で調査した華人系大学2校は、いずれもインドネシア教育文化省の設置認可を得た高等教育機関であり、中国語教育は大学の多くのプログラムの中の一つの科目として存在し、文化の多様性を重んじるインドネシア社会にふさわしい人材育成の目標にも合致している。また、中国経済が好調であることにより、中国語学習ブームが起こっている中、大学の中国語教育の質を高めるため、人材育成に力点が置かれている。

他方、本稿で考察した両大学は孔子学院のパートナー大学にはなっていない。このことは、上述したインドネシア側による孔子学院の連携大学の選定においては、インドネシア教育文化省が推薦した大学しか考えられなかったことに関係していると考えられる。但し、孔子学院のパートナー大学ではないものの、孔子学院とはやはり次のようなつながりを持っている。

第一に、中国語学科の運営は、孔子学院から講師派遣の支援を受けている。調査対象のビナ・ヌサンタラ大学とブンダ・ムリア大学のみならず、第2節で触れたダルマナガラ大学を含む他の華人大学にも孔子学院は講師を派遣している。

第二に、孔子学院の奨学金制度を利用して、当該大学関係者を中国に留学させ、教員の養成に役立てている。

加えて、アル・アザール大学孔子学院の設立時には華人から資金面での支援を受けたことがあり、

今後、孔子学院の民間運営方式への機構改革に伴い、インドネシアの華人社会に対して資金援助を求める動きも起こることが予想される。

しかしながら、アル・アザール大学孔子学院はジャカルタ地区の大学に対する中国語教育の支援を行っているが、華人系大学に対する特別な支援を行っているとは言い難い。歴史的事実としてインドネシアにおいて華人抑圧政策が執られたことから、中国政府は華人以外の人々を刺激しないように配慮し、奨学金提供などで非華人への優遇策をとっていることがインタビューの随所で感じられた。華人系大学側と孔子学院は、政治的にセンシティブな問題であることに配慮しつつ、中国語教育の促進という共通目標を持ち、互惠関係を図っていると言えよう。

【附記】本稿は、平成30年度～令和2年度 科学研究費助成事業 課題研究科学研究「アジア諸国における華僑・華人による大学運営実態に関する実証的比較研究」（課題番号:18K02430）（研究代表者：大塚豊）の助成を受けたものである。

【注】

- 1) 中矢礼美・劉国彬「インドネシアにおける華人系大学の特徴」第14回アジア教育学会大会（名古屋市立大学、2019年11月2日）口頭発表資料。
- 2) 2020年7月5日、中国教育部は、孔子学院を中国国内の大学と企業がメンバーとなる「中国国際中文教育基金」が運営することになった。つまり、孔子学院の運営を軌道修正することで、国の事業から民間運営に移したのであり、孔子学院の存続にとって大きな方向転換となる。
- 3) この調査は、筆者と広島大学中矢礼美准教授が共同で実施したものである。
- 4) 前掲、2019年11月2日に第14回アジア教育学会大会で行った口頭発表資料。
- 5) 孔子学院の他、学院に準ずる主として小中学校に置かれる孔子課堂が1,170ある。本文では、孔子学院を中心に考察することとする。
- 6) 一般的に、華僑とは中国・台湾・香港・マカオ以外の国家・地域に移住しながらも、中国の国籍を保持し続ける中国人の呼称であり、一方の華人は居住国の国籍を有し、または現在の居留国生まれで居留国の国籍をもつものを指す。
- 7) 2019年9月19日にアル・アザール大学孔子学院の教員に対して行ったインタビューによる。
- 8) 2019年9月19日にアル・アザール大学孔子学院の肖忠祥（学院長）氏に対して行ったインタビューによる。
- 9) 「印尼阿拉扎大学孔子学院創辦10年成績受多方肯定」中国新聞網、2020年12月24日。
<https://baijiahao.baidu.com/s?id=1686914870868847353&wfr=spider&for=pc>（2020年12月25日閲覧）
- 10) 2010年に設立した6つの孔子学院は、アル・アザール大学孔子学院（アル・アザール大学と福建師範大学提携）、スラバヤ国立大学孔子学院（スラバヤ国立大学と華中師範大学提携）、マラナタクリスチャン大学孔子学院（マラナタクリスチャン大学と河北師範大学と提携）、マラン国立大学孔子学院（マラン国立大学と広西師範大学提携）、ハサヌディン大学孔子学院（ハサヌディン大学と南昌大学提携）、タンジュンプラ大学孔子学院（タンジュンプラ大学と広西民族大学提携）である。
- 11) 華語（MANDAARIN）は特に東南アジアを中心とする海外の華僑華人社会で用いる共通語の呼称で、中華人民共和国で用いられる「普通話」、あるいは台湾の「国語」と同じである（『華僑華人の事典』：306）。
- 12) 前掲、2019年11月2日に第14回アジア教育学会大会で行った口頭発表資料。
- 13) 2019年9月20日にビナ・ヌサンタラ大学の教員に対して行ったインタビューによる。
- 14) HSKは母国語を非中国語者（外国人、華僑及び中国国内の少数民族）の中国語レベルを測定するために作られた中国語国家標準化試験である。この試験は北京語言大学にある中国語レベル試験センターが開発し、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠組み）という世界共通の基準に準拠するよう設計されている。目的は、中国語を母語話者ではない受験者の生活、学習と仕事において中国語のコミュニケーション能力を測るためである。HSKはHSK（1級）、HSK（2級）、HSK（3級）、HSK（4

- 級)、HSK (5 級)、HSK (6 級) の 6 段階があり、6 級は最上級レベルである。
- 15) 前掲、アル・アザール大学孔子学院の教員に対して行ったインタビューによる。
- 16) HSK5 級から最高級の 6 級は合格点をもうけていない。一般的に 6 割 (300 点満点) を獲得すれば合格と見なされる。
- 17) 「漢語橋」とは、世界の中学生・高校生・大学生を対象とした中国語スピーチコンテストの名称である。中国政府が主催、各国の全国レベルの中国語スピーチコンテストでトップを獲得した者は中国で最終参戦する。中国語コンテストのオリンピックとも言われ、中国政府主催による最も高いレベルのコンテストである。
- 18) 2019 年 9 月 16 日にブンダ・ムリア大学の教員に対して行ったインタビューによる。
- 19) 同上。
- 20) 同上。
- 21) 同上。

【参考文献】

- アル・アザール大学孔子学院「PUSAT BAHASA MANDARIN UNIVERSITAS AL AZHAR INDONESIA」第4期、2019年3月。
- 愛柏珍/恩達著/李卓輝編訳 (2013) 『從攤商到万間愛發商店：郭桂和開創零售行奮闘進程』 Jakarta: PT Gramedia pustaka utama。
- 大塚豊 (2015) 「インドネシア地方都市における漢語教育」福山大学 大学教育センター『大学教育論叢』創刊号、47～65 頁。
- 大塚豊 (2016) 「アジア諸国における漢語教育と華僑・華人の民族アイデンティティ/カンボジア、タイ、インドネシア、ベトナム調査から」福山大学 大学教育センター『大学教育論叢』第2号、81～99 頁。
- 王道征 (2018) 「一帯一路框架下中国同印度尼西亞合作的机遇・挑戰及合作重点路径選取」印度尼西亞研究。華中師範大学 <http://www.cistudy.cn/html/4-5/5111.htm> (2020 年 9 月 8 日閲覧)
- 科研費報告書：平成 26 年度～平成 28 年度科学研究費補助金 (基盤 C) 研究成果報告書 (2017) 『中国の対外言語教育政策に関する研究/孔子学院の世界展開を中心に』 (大塚豊・福山大学)。
- 華僑華人の事典編集委員会編 (2008) 『華僑華人の事典』丸善出版。
- 嚴曉鵬 (2014) 『孔子学院与華文学校發展比較研究』浙江大学出版社。「孔子学院」
<https://ja.wikipedia.org> (2020 年 9 月 5 日閲覧)。
- 孔子学院総部/国家漢辦 (2015) 『孔子学院年度發展報告』。
- 国家漢辦 新聞中心「中外語言交流合作中心設立公告」。
http://www.hanban.org/article/2020-07/05/content_810091.htm (2020 年 9 月 9 日閲覧)
- 顧明遠 (主編) (1992) 『教育大辭典第 4 卷』上海教育出版社。
- 朱敬先編著 (1973) 『華僑教育』台湾中華書局。
- 姜冬梅 (2011) 「印尼孔子学院的建設現狀分析及解決方案」『湖南科技学院学报』第 32 卷第 3 期、13～15 頁。
- 中矢礼美 (2002) 「インドネシアの高等教育カリキュラムに関する研究」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第 48 卷第 1 部、410～415 頁。
- 日本比較教育学会編 (2008) 日本比較教育学会編『比較教育研究』37、東信堂。
- 西村俊一 (1991) 『現代中国と華僑教育』多賀出版。
- 葉曙明 (2018) 『印尼華僑華人史話』広東教育出版社。
- 「ビナ・ヌサントラ大学」<https://binus.ac.id/> (2020 年 9 月 11 日閲覧)
- 「ブンダ・ムリア大学」<https://www.ubm.ac.id/> (2020 年 9 月 11 日閲覧)
- 李啓輝・姜興山 (2015) 「印尼孔子学院現狀与發展探析」『福建師範大学学报 (哲学社会科学版)』第 9 期、161～166 頁。

- 劉国彬 (2019) 「HSK の回顧と考察」 福山大学 大学教育センター『大学教育論叢』第 6 号、21～32 頁。
- 梁英明 (2013) 「从中華学堂到三語学校／論印度尼西亚现代華文学校的發展与演变」『華僑華人歴史研究』第 2 期、1～12 頁。
- リン・パン (編) 游仲勳 (監訳) 他 (2012) 『世界華人エンサイクロペディア』明石書店。